ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦

John.Doe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦

【Ｎコード】

Ｎ８３５３Ｗ

【作者名】

Ｊｏｈｎ．Ｄｏｅ

【あらすじ】

まさかまさかの大乱闘！？　勢いでやった。今は反省している。時代も思想も異なる「蛇」達が集まった！　理由は最強決定戦！？

メタルギアに関する許されない気もしないでもないギャク（だったらいいなあ）コメディ！　細かいことを気にしてはいけない（ｂｙネイキッド・スネーク）。

なお、本作ではそれぞれの人がそれぞれに対する呼び名が違うため、多少混乱するかもしれません。また、キャラ会話文が異常に多いです。おふざけを許容できる方のみお読みください。それ以外は

私にあたられても困りますので、どうぞご容赦ください。
ちなみに、地の分のキャラに対する呼称は基本的に統一してあります。

選手入場（前書き）

気がついたら書いて投稿していた。こんなこと、始めてだッ！

かなーりはっちゃけた（というより無茶苦茶？）な内容です。むしろ作者のおふざけにしか見えないかもしれませんが、ご容赦ください。

選手入場

『さあさあ始まりました、真に強い蛇は誰かを決める今大会！　その名も！　Ｍｏｓｔ　Ｇｒｅａｔｅｓｔ　Ｓｎｅａｋ！　略してＭＧＳ！　文法は気にしたら負けだっ！　実況はアラスカでの任務以来遺伝の下痢が酷くなってしまった、ジョニー佐々木と』

『なぜかこの時代に来てしまいました、カズヒラ・ミラーでお送りいたします！　さてさて、今大会。Ｓ３計画にて生まれたＢＩＧ　ＢＯＳＳの息子達が凌ぎを削る！　熱い漢達の熱い戦いッ！　さあさあ！　俺達の性格が変わってるのはさておき、選手の紹介と行くぞー！』

『まずはこの人！　ＢＩＧ　ＢＯＳＳを倒せず恨みに燃える！　リキッド・スネェェェェク！』

どこからか上がった煙の中から、リキッド・スネークが現れる。上半身は服を着ていない。ベージュのズボンのみだ。

「いけないか？　こいつらを敵に回して！」

『おおっと早速の宣戦布告だ―！　さあジョニー！　次の選手は一体誰なんだ！？』

『よぉし、次はこの人！　ＢＩＧ　ＢＯＳＳの純粋なるクローン！　愛国者達を知っていた数少ない男！　ソリダス・スネェェェェク！』

再び煙が噴き出す。その煙を吹き飛ばして現れたのは、マッスルスーツの生んだ炎と共に爆走したソリダス。左目には眼帯をしている。

「私は奴らを倒して自由になる！　まさに、自由の息子（サンズオブリバティ）になるのだ！」

『一体蛇達を倒してどう自由になるかはおいておいてだ！　ジョニ

ー！　次を頼む！』

『お次は特別参戦のこの男！　恋人（ローズマリー）も見ているぞ！　ライデェェェェン！』

青いスカルスーツを身にまとい、忍者刀に似た剣を背にさして現れた、顔の整った男。女性からは黄色い声が、男性からはブーイングが巻き起こった。笑みを浮かべた彼の周りに心なしか光が輝く。

『リア充うらやましいなこのやろぉ！　で、なんでこいつは参戦したんだ？』

『彼はビッグシェルに潜入した当初のコードネームがスネークだったんだ。あのイケメンはそれで参加枠を得たんだとこの原稿には書いてある』

『そうか……では、気を取り直してジョニー、次を頼む！』

『そうだな、あんなリア充は放っておこう！　ていうかあんたもモテるだろ！　……よし、次はお待ちかね、我らが英雄（ヒーロー）！　ソリッド・スネェェェェク！』

煙が勢いよく吹き出し、しばらくの時をおいて止む。しかし、煙が晴れて出てきたのは、一つのダンボールだけだった。

『あ、あれ？』

『ミラー、ちょっとスタッフを――――』

ジョニーが言いかけた時。ダンボールが突如持ち上げられ、中から薄い青のスニーキングスーツを着て、濃い青のバンダナを巻いた僅かに髭を蓄えた男。

「待たせたな！」

ニヤリ、と笑みを浮かべて宣言するソリッド。一瞬静まり返った会場を、割れんばかりの大喝采が包む。

「スネェェェェク！」

「リィキッドォォォォ！」

『おぉっとぉ！　早速二人の蛇達がライバル同士の火花を散らして

……ってソリダスとライデンも無言の睨み合いが行われているぅぅ！』

『さて、ミラー。驚いてはいけない！　今回、特別ゲストとしてある蛇達をもう二人呼んでいる！』

『おおっ！　よし、早速紹介してくれっ！』

『まずはこの人！　蛇達唯一の女性兵士！　伝説の兵士、戦士（ヴォエヴォーダ）とも呼ばれたこの人！　ザ・ボス！』

煙がまたも吹き出し、その中から純白のスニーキングスーツを纏った女性が歩いてくる。鋭い眼光、纏う雰囲気。間違いなくザ・ボスだった。

「光は死にゆく者への闇からの餞別……」

『おおっと、その手に持ってるのはまさかデイビー・クロケットの発射筒じゃないか―！？　まてまて！　この大会で死人を出さないでくれ！　じゃないと――――』

『タイムパラドックスだ！　未来が変わってしまった！　未来を知ることだ、スネー（ｒｙ』

「大佐！？」

どこからか聞こえてきたロイ・キャンベルの声に、ソリッドが反応する。ライデンも越えこそ出さなかったものの、かなり驚いたようだ。

『……ジョニー。何？　今の』

『知らん。さあ、伝説の兵士、ザ・ボス。その力を蛇達は超えることが出来るのかっ！？』

『（ネイキッド・）スネーク曰く、ザ・ボスの持つパトリオットとＣＱＣは大きな壁になりそうだな』

『さあ、ミラー。もう一人のゲスト、驚いてくれるなよ？　三人の蛇達のオリジナル！　伝説の英雄、ネイキッド・スネェェェェク！』

『ボスゥゥゥゥ！？』

噴き出す煙。その中に人影と、赤い点が浮かんでいる。煙が晴れて姿が現れる。上半身は裸、下半身にはタイガーストライプパターンの迷彩服。そして所々擦り切れてしまっている濃緑のバンダナ。先程の赤い点は、彼の吸っている葉巻（シガー）だった。しかし、何やらとんでもなく不機嫌なようだ。

「おい、今回の主催は誰だ！　ソ連製のレーションなんか食えるか！」

『……あれが、伝説のＢＩＧ　ＢＯＳＳ？』

『ああ、そうだが？　しかし、誰だ主催は本当に。俺達で開発したレトルトカレーの傑作、ボンカレーＮＥ○を使えと渡してあったはずなのに』

『……さ、さて、気を取り直して、解説者の紹介を……うっ、腹が……！！』

『お、おいジョニーどこに行く！？　……ん？』

いつものアレで席を立ち走っていったジョニーに唖然とする会場。一部の人間は、ああ、またか、という生暖かい視線ではあるが。そのジョニーが座っていた椅子に落ちていた箱を見つけて拾い上げたミラー。その眼に映ったのは――――

『……こいつが犯人か』

手にしたのはボンカレーＮＥ○のパッケージ。どうやらつまみ食いをしたらしい。

「食糧がなくなってる！？　それはそいつのせいなんだな！？　よしイグアナ、ホーク！　手伝え！　カズ、お前もだ！」

『お、俺も？　ってボス、それは――――――――』

半ば強引に拉致されたミラーは、覆面を被ったイグアナとホークが支える支柱をつなぐ、スネークの持つゴム。その真ん中にセットされた。スネークが反対側から力いっぱい引っ張る。彼らは約束していた――――――――――この兵器が完成したら、Ｄ（弾丸）役はカズが実験しろ、と――――――――――

「最強合体兵器！　『人間パチン虎。』！」

最大限にひっぱっていたゴムから手を放すと、凄まじい勢いでミラー（ジョニー）がトイレに向かって飛んでいく。

「ボスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

虚しくミラーの叫びが響き、トイレに着弾する。扉どころかトイレそのものが吹き飛び、何故か何発も花火が撃ちあがる。

選手入場（後書き）

次回からいよいよ競技開始です。

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦　前半戦（前書き）

ライデンはそういう役回りなんです。

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦　前半戦

『ここからは解説のグレイ・フォックスと』
『オタコンこと、ハル・エメリッヒがお送りするよ。さあ、吹き飛んだ解説の二人は放っておいて、第一競技に行こう！　最初は……』
オタコンが溜めを作り、その間に六人の蛇達に緊張が走る。
『すべての兵士の基本！　重量挙げだ！』
オタコンが高らかに宣言し、観客の歓声が沸き起こる。
『いいかい、ルールは簡単。今から機械で君たちに上から負荷をかけていく。一番最後まで残った人に得点だ』
『今から俺がスイッチを押す。それからがゲームスタートだ。では、そこの白い四角の中に一人ずつ入れ』
フォックスが言うとおりにする蛇達。フォックスがレバー状のスイッチを押した。
『死ねぃっ！』
……
すると、どこかで見た脚状の機械が現れ、彼らに振り下ろされた。蛇達は頭上に両手をやって構えている。
ずんっ、と鈍い音と共に、競技がスタートした。と、同時に――

――――――
「ぐあぁぁぁぁっ！」
「ジャーーーック！」
ジャックこと、ライデンが潰れる。ローズマリーの悲痛な叫びとは裏腹に、かなり珍妙な状況であるが。
『おいおい、あれでもＭＧＳの参加者かい？　ってあぁぁっ！？』
オタコンが呆れたように言うと、視線の先を変えて更に驚嘆の声を重ねる。
「くぅぁぁぁ！」
『ほう、伝説の兵士も力はないのか？　ＢＩＧ　ＢＯＳＳの腕を容易くへし折るというのに』

『……彼女の世代じゃ機械はまだまだ発達していないからね。ちなみに彼女の力は本来凄まじいはずなんだ』
吹き飛ばされ、ライデンのようにつぶされはしなかったが、予想に反してかなり早くザ・ボスが脱落する。あるいは、他の蛇達がそもそもおかしいのだろうか。

『……ん？　ちょっと待って。よく考えたら、ソリダスの来ているマッスルスーツは……』
『ああ、確かに自身の強さじゃないな。これは反則だ』
オタコンがふと気づいたソリダス・スネークの着ているマッスルスーツ。マッスルスーツとは、外的に装着することによって筋力その他をサポートさせることが出来る。つまり、ソリダス本来の力ではない。警備兵たちがぞろぞろとＡＫ－７４を引っさげやってくる。ソリダスのスペースの機械を止め、兵士がソリダスを拘束する。
「くっ！？　貴様らロシア兵だな！？　貴様らいままで何をしていた！？」
ソリダスの怒りがこもった声に、会場全体が「だから警備員だろ？」というツッコミを心の中で入れる。ずるずると兵士に引きずられ、ソリダスは退場となった。
『さあ、残るはネイキッド、ソリッド、リキッドの三人！　誰が残るか……僕の予想としては、リキッドだね。彼はタフだし、火事場の馬鹿力もとんでもないほどだ』
『俺はビッグボスか。ソリッドは知らんが、ネイキッドは……ふむ、見てみろ』
フォックスが指した先では、ソリッドが既に膝と肘、そして首を曲げている。「不可能を可能にする男」と言われている彼だが、流石にこれは無茶であったか。
『年を取ったなスネーク。見ていられないぞ』
「くっ……」
フォックスが声をかけるが、悔しそうな声を上げるだけで反論で

きないソリッド。そして、同じく兄弟であるリキッドもまた、限界が近づいてきていた。
「まだだ！　まだ終わってない！」
「リィキッドォォォォォォ！！」
『ほう、持ち直したか？　……いや、ダメだな』
一度は持ち直した二人。しかし、ソリッドはその最後の抵抗虚しく、再び関節が曲がっていく。そんなソリッドを、リキッドが挑発し始めた。
「結局貴様は誰も守れやしない！　自分の身さえな！　死ねぃ！」
それを最後に、弾かれる様にソリッドが押し負けた。ついに、オネリジナル（イキッド）とその優性遺伝を集めた息子（リキッド）のタイマンとなる。しかし、早々長くは続かない。リキッドもまた弾かれ、脱落した。
『勝者、ネイキッド・スネーク！　じゃあ、今から機械を止め……え？』
「ぬっ……ふっ……そおりゃあぁ！」
気合の声と共に、一気に力を入れるスネーク。すると、あろうことか皆は支えるだけで精いっぱいだったその機械を逆に押し上げ、投げてしまった。ばきり、と音を立て、内部の歯車（ギア）やらコードやらが露出しつつ、音を立てて地面に落下した機械はショートを起こした。
『……し、信じられん』
『あ、いつの間に戻ってきたんだい？』
『俺は今さっきだ。ジョニーはまだだがな。しかし、ボス、まさかあんなことができるとは……』
「「「流石です！　ボス！！」」」
『さあ、次の競技行ってみよう！　さあ、次の競技は……むむ！兵士の基本その２！　短距離走だ！』

再び海上が盛り上がる。
『ルールはこれまた簡単。単に４００ｍのトラックを走ってもらうだけだよ』
『ちなみにボスは３０マイル位なら走れるらしい。短距離走はどうだか知らないが』
『俺としてはライデンが有利なのではと思うがな』
『僕はソリッド・スネークかな』
そんなことを話す間に、六人は……もとい五人（ソリダス以外）はスタートラインに着く。
「位置について！　レディ！」
マカロフ（のように見えるが火薬のみの合図用）を掲げた兵士が、銃口をゆっくりと握りしめる。
「ムーブ！」
火薬が爆ぜる音と共に、号令がかかる。同時に全ての蛇達が走り出した。
『おぉっとぉ！？　速い！　ザ・ボスが速い！　他四人を置いてけぼりだ！』
『俺といい勝負か……？』
『逆にリキッドはビリだね。ライデンとビッグボスが二位争いか』
そんな状況で。会場の全員は目を疑った。
「ダンボーーーール！」
突如叫んだスネーク。どこからかラブダンボールを取出し、被る。そのまま、あろうことか走るより早い速度で移動し始めたのだ。
「うわあぁっ！」
「ジャーーーック！」
再び響く悲痛な叫び。ダンボールに弾き飛ばされたライデンは、そのまま二人の蛇に踏まれてもみくちゃになった。
『……ええっと。ライデン、大丈夫か？　ボスのダンボールタックルは痛いからなあ』
『ダンボール……どこかの誰かも好きだよね』

『おい、よく見ろ。順位はそれなりに固定されてきたぞ』
前からザ・ボス、スネーク、ソリッド、リキッド、そしてライデン（脱落）。論外的ではあるが退場でソリダス。リキッドとソリッドの二人は僅差ではあるが、前二人、そして後ろの残念なイケメンは距離が開いてきている。
「お前達に私は抜けない。私を知らな過ぎているからだ」
４００ｍを走り終えたザ・ボスが後ろに振り向き、宣言する。そのままダンボール（スネーク）、ソリッド、リキッド、ライデンの順でゴールしていった。

『ええと……予想外でもなんでもない結果で終わった短距離走だな。さあ、次の競技は……』
『サバイバルだ！』
『ジョニー！　帰ってきたのか』
『ああ、今さっき。じゃあオタコン、説明よろしく』
『うん、と言いたいところだけど、僕はこの競技はよくわからないんだ。フォックス、頼むよ』
『この競技は、戦場で重要となる自給自足にかかわる。ミラー。ボスとお前があって、いくつか勝負をしたときのセリフは覚えているか？』
『食えるものを食えるときに食えるだけ……兵士としてそんな胃袋を持つべきだ。これか？』
『そういうことだ。つまり、今から食糧の早食いを競う。こちらが用意した食材を一番早く食べ終ったものの勝利となる』
『フォックス。俺には、勝敗が見えたんだが』
『え、誰だい？』
『ボスだ』
『ビッグボスか？　でも、さっきはレーションに怒っていたじゃな

いか？』

『それ、君が言えたことかい？　と、とにかく！　じゃあ、食材を紹介しよう！』

――――――――――――――――――――――――――――――――続きは次回へ！

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦　前半戦（後書き）

ちなみに、セリフはシリーズ作品からとったものもおおいですので、ピンとくる人もいるかも？

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦　後半戦（前書き）

今回も自分でも呆れるほどはっちゃけちゃってます。どうぞ、お許しを……それと、投稿が微妙に遅れて申し訳ないです。

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦　後半戦

『……何コレ？』
『見て分からないかいジョニー？　ただのアミメニシキヘビにアロワナ、それとウラルツキヨタケじゃないか？』
『……オタコン。俺の短い教官経験でもわかる。これは食糧ではあるが食材とは言わない』
『……そうだね。まあ、準備したのはフォックスだから』
「おい、オタコンとやら！」
『どうしたんだい、ビッグボス』
「そのキノコ。ウラルツキヨタケと言ったが本当か？」
『そうだよ？　僕がリストアップして頼んだんだ。君がスネークイーター作戦に使う資料を参考したんだよ』
　そう返され、スネークは黙ってしまう。そう、彼には分っている。あのウラルツキヨタケの本当の性質を。
「なあオタコン。その資料、もしかしてパラメディックが持っていたやつか」
『パラメディック……？　ああ、クラーク博士だね。そうだよ？』
「そのキノコはやめておけ」
『どうして？』
『なんだ、ボス。キノコは嫌いか？』
「カズ、そこのキノコ。食ってみろ」
『こんなもん、生でも食え……ウグッ！？』
「そのキノコは毒キノコだ」
『げ、解毒剤を……！』
『フォォォックス！　げ、解毒剤取ってきてくれ！』
『これか？』
『た、助かった！』

『えっと、どうやら一悶着ありましたが片付いたようで。ちなみに、食糧からウラルツキヨタケ（毒キノコ）は外したから安心してくれッ！』
スネークを筆頭に、蛇達が各々ほっとしたようだ。流石に、いくら早食いでも毒キノコは（スネークを除いて）シャレにならない。
『さて、今回はミラーにも参加してもらうぞっ！』
『え〝っ！？』
『いや、カズヒラ・ミラーの出身国は日本でしょ？　日本人なら生（ロウフ）魚（イッシュ）も食べるじゃないか』
『いくら日本人でも……まるごとは……』
ぶつぶつと呟くカズヒラだったが、実況、解説の総員により結局参加させられてしまった。

『では、号砲を頼む！』
ジョニーの声に頷いた兵士が、空に向けた銃のトリガーを引いた。それと同時に、一斉に食糧に手を付けた。
「何年ぶりか……懐かしいな！　サバイバルビュアァァー！」
「サ、サバイバル……えぇ！？」
驚くカズヒラと蛇達をよそに、何故か鳴る電子音。と、豪快にアロワナにかぶりつくスネーク。ちなみに、ザ・ボスもほぼ同じタイミングで食べ始めた。
『おっと、ボス二人が早くもアロワナに手を出した！　ってそのま

ま！？　いや、確かに煮たり焼いたりはダメだけど……』
　ここで日本を知っているジョニーにも、ようやくカズヒラの渋っていた理由が分かったらしい。他の蛇達は、二人に一歩出遅れた形となった。カズヒラはまだ手を付けていない。
「そ、そんな一息に……腸（はらわた）まで食ってる……」
「この柔らかいところがいいんだ」
　いまだ嬉々として貪り食っているスネーク。ザ・ボスもなんとなく嬉しそうであるが、恐らく気のせいであろう。きっと野生化しているのはスネークのみである。他の蛇達もようやく調子に乗ってきていたのだが、スネークとザ・ボスの食べっぷりを見て戦意を失いかけている。カズヒラに至っては既にアロワナやアミメニシキヘビが手から落ちてしまっている。
「あ、寄生虫が……」
「よく噛めば死ぬ」
「えええ……」
『……フォックス。僕は今、とんでもない言葉を聞いた気がするんだけど』
『気をつけろ。そこには長時間見ていると嘔吐しやすくなるトラップが仕掛けられている。エチケット袋を使え！』
『そろそろ止めていいか？　俺また腹が痛くなりそうだ……』
　そんな、顔色の良くない実況と解説の３人。その間にも、トップを独走するスネークがアミメニシキヘビをほとんど食い尽くしていた。
「食糧がなくなってる！？」
『もうねえよっ！　ストップ！　ストーップ！　勝者、ビッグボス！』
「流石です、ボス！」
「おみごと、ボス！」
「ジョ、ジョニー。次の競技」

『えっと……次が最後の競技だ！　その課題はなんと！　ＶＲミッション用の機械を使用した競技！　ＶＲ空間を利用して、量産型メタルギア、メタルギアＲＡＹを何体破壊できるかを競ってもらう！』
『なお、この競技では俺の好みで、スティンガーミサイルは使用できない。使えるのはレッドアイだけだ』
　カズヒラの辛すぎる条件に、主にソリッドとライデンを中心に反対が起こる。
「それは本当かマスター！？　あいつらにスティンガーではなくレッドミサイルで挑めと！？」
『なんだ、怖気づいたか？　既にボスはやる気みたいだが』
「おい、これはどうやって使うんだ？　と、いうかスティンガーって何だ？」
『……』
『ビッグボスが生きていた時代にはスティンガーはまだ開発されていなかったんだね。ちなみに、いくらＶＲだとはいえ、ダメージを食らえば痛覚も刺激される。一部は知っているとは思うけど。気をつけて挑んでくれよ。じゃあ、そこのマシンに座ってくれ。セットはこちらで行う』
　オタコンの指示に従い、椅子のようなそれにこしかける。続いて兵士たちがそれぞれのマシンをセット、作動させ、競技がスタートした。

『さあ、聞こえるかな？　今からメタルギアＲＡＹと戦ってもらうけど、普段みんなが使うような装備を既に装備している設定になっている。僕が調べた情報ってだけだから不十分かもしれないけど、そこは我慢してくれ。さあ、競技を始め……』
『うぉっ！　ソリダス、いつの間にってああ！　ＶＲマシンを勝手に使っちゃ……ウソだろ、どうして使えるんだ？』

驚愕の声をあげたジョニーだが、その言葉通り、いつの間にか復帰したソリダスがＶＲマシンを自分自身で操作し、同じＶＲ空間に飛び込んでいった。
「私が欲しいのは自由、権利、機会！　しかしそれすらもルール上で奪われようとしている！」
『うん、ルールは守ろうなソリダス。とりあえず、今回はマッスルスーツもｏｋなのか？』
『別に問題はないはずだ。兵器扱いだからな。反則なら、こちらで操作すればいい』
フォックスの答えに、カズヒラは頷きだけを返し、今度はジョニーに向かって、別の意図をもって頷く。その意を了解したジョニー。
『では、はじめ！』
ジョニーの合図と共に、オタコンがＶＲ空間を操作、メタルギアＲＡＹを登場させた。その数、１人につき３体。８角形状のステージを囲うように、配置された。それが動きだし、蛇達もまた動き出す――――――
『さあ、まずは……お？　ライデンが一番早く動いたぞ！？』
『彼は一度ここで戦っているからね。ソリダスも動き始めたよ』
『レッドアイを脚に打ちこんで弱点の口を開く戦法だな、ライデンは』
『知ってるのかい、フォックス？　まあいいや。ジョニー。ビッグボスとザ・ボスはどう？』
『……ザ・ボスはもはやワンサイドゲームだな。ビッグボスは……もはや彼が人間とは思えない』
ふう、とため息をつくジョニー。そのジョニーが見ていたモニターを見ると、彼らの戦いが映し出されている。同時進行ということで、それぞれがモニターを分別して見ているのだ。

「どこから出てくるかを疑いだすとキリがない」
愛銃、パトリオット（愛国者）を乱射しながら、ぼそりと呟くザ・ボス。Ｍ１６と同じ５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を使用しているはずではあるが、ＲＡＹはその威力に打ち負け、足止めされ口を開き、そこが弱点と見抜かれているために集中的に撃ちぬかれ、その残骸を積み重ねていく。恐ろしいことに、純白のスニーキングスーツを身にまとった彼女は、その場から一歩たりとも動いていない。水圧カッターを出そうとすれば口に銃弾を受け、ミサイルを撃てばすべて瞬く間に撃ち落される。踏みつぶそうと足をあげればもう片方に大量の弾丸を食らいバランスを崩す。
かれこれ倒しに倒して既に１０は倒している。流石にパトリオットの特殊な構造上腕が悲鳴を上げ始める。右腕から左腕に持ち替えて再び撃ち始める。

「うぉぉらぁぁ！」
踏みつぶされていたように思われたスネークだが、気合の声と共に先程の重量挙げという名目上機械につぶされるのを防ぐ競技の時と同じようにＲＡＹの脚を跳ね除ける。バランスを崩して口を開いたところへすかさずレッドアイを打ち込み、破壊する。耐久力は低いな、などと思いつつ水圧カッターを回避し、装填の間に合わないレッドアイではなく、Ｍ６０Ｅ１の７．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を撃ちこんでいく。ザ・ボスの空間より倒れている残骸は少ないものの、それでもそれなりの数のＲＡＹが転がっていた。

『お、おい。その2人もすごいが、こっちも結構ヒドいぞ……』
そういってカズヒラが指したのは自身が見ていたモニターの一つ。ソリダスの方のモニターだ。

「愛国者達め！」
八つ当たりのように言ったソリダス。マッスルスーツが僅かに膨れ上がる。水圧カッターをかわすべく斜め後ろに跳びながら、手にしたＦＮ　Ｐ９０のトリガーを引く。開けた口にいくつも弾丸が食い込み、激しいショートを起こす。続いて少し蛇行しながら走ることでミサイルをかわし、背に回したスネークアームの力でＲＡＹの頭部に飛び乗る。そのまま頭部、つまり足元目がけてトリガーを引く。頭部の比較的硬いはずの装甲を貫通し、衝撃で頭部を揺らしながら機能を停止する。燃え盛り始めるその上で、こちらを睨んだレイを腕だけ動かして葬る。あっという間に3体のＲＡＹを沈めたソリダスは、その前にも数体を倒している。もはやこの空間でも、ワンサイドゲームとなっていた。

『ソリッドとリキッドは少し苦戦しているようだな。ソリッドはまだレッドアイをつかいこなしているが、リキッドはソリッドに一歩劣るといったところか』
フォックスがそう言ったのを聞いて他3人も見る。確かに、ソリッドの方は的確に膝をつかせて口内にミサイルを当てているが、リキッドはその動きにキレがなく、時折レッドアイの着弾前に口を閉じられる。
『そういえば、リキッドはメタルギアとの交戦経験はなかったからね。それでもあそこまで戦えるのはすごいんじゃないかな？』
『ザ・ボスは彼らのオリジナルの師だからな。その差があるのか？ん？』

カズヒラが感慨深げにそういったのをよそに、リキッドのモニターにて変化が伺えた。

「今から見せてやろう！　２１世紀を導く悪魔の兵器をな！」

どこから出したのか……もっとも、ＶＲ空間であるため基本的には不可能ではないが、いきなり叫んだリキッドのすぐ後ろに、あろうことかもう一体のメタルギア。それも、ＲＡＹとは根本的に形状が違う。ＲＹＡのような曲線的フォルムではなく、直線の多い、まさしく恐竜を彷彿とさせるそれは、通称メタルギアＲＥＸと呼ばれる、ＲＡＹの原型だった。

『お、おいおいおい、なんなんだあれは？』

『あれはメタルギアＲＥＸ。今彼らが戦っているＲＡＹは、ＲＥＸを含めたメタルギアへの対抗手段……対メタルギアメタルギアといったところなんだ。僕が開発した物なんだけど……すっかり悪用されちゃってね』

『動き出すぞ』

フォックスの言葉に、モニターに視界を戻す。メタルギア同士の戦い――――圧倒的に、数と性能の差でいえば、ＲＥＸが不利であるはずだった。

『信じられない……オタコン、本当にＲＡＹは対メタルギアメタルギアなんだな？』

『俺もにわかに信じられん……ついでにこれらをなぎ倒すボス達も』

『そういえば、彼はＭｉ－２４Ｄ（ハインドＤ）でＦ－１６二機を撃ち落したことがあったんだ。戦闘センスだけでいえば、もしかしたらこの中では一番かもしれないね』

そういう間にも、リキッドはＲＥＸに搭乗、起動し、ミサイルやレーザー、頑丈な機体での体当たりなどを繰り出し、次々とＲＡＹを沈めていく。もはや、彼の空間だけは、単なるロボット同士の戦闘の様になっている。ミサイルが飛び交い、レーザーか水圧カッタ

ーが交わり合い、機体同士がぶつかり合う。何かテレビゲームやアニメを見ているようだ。

『さあ、なんだかんだとありましたが、制限時間になりました！ジョニー。結果発表を頼むぞ』

『ああ。まずリキッド・スネーク。３８体。ソリダス・スネーク。４２体。ソリッド・スネーク。２４体。ライデン。２３体。ザ・ボス。４７体。そしてビッグボス。４４体。よってこの競技の勝者は、ザ・ボス！』

湧き上がる歓声。ＶＲ訓練用のマシンから立ち上がっていた彼らは、その発表された結果に驚きを現す。主にソリッドとライデン。自分たちの二倍近くあのバケモノを倒したのだ、無理もないだろう。

そうして、全ての競技は終わり、この大会……といえるのかも分からない会も、幕を閉じようとしていた。

完結編（表彰式）

『さて、結果発表なわけだが……ここで失格者が一名いるな。まあ、ソリダスだが』
『当然だろ？　そういえば、俺は重量挙げと短距離走を見てないんだけど』
『さあ、結果発表に移るぞ！　まず、ワーストから行こう。ええと、ワーストは……』
『……ライデンだな』
慈悲のかけらもないカズヒラのその一言に、がっくりと肩を落とすライデンとローズマリー。ちなみに、ソリッド・リキッド両名は勝ち点こそないがビリになった競技もないため、ライデンよりは順位が上である。
『そしてリキッド・スネーク、ソリッド・スネークと続き……第二位、ザ・ボス。優勝は……ビッグボスだ！』
「「「流石です！　ボス！」」」
『いやあ、流石スネーク！　よし、じゃあ表彰式にうつうぉわっと！』
カズヒラが上機嫌に言ったその足元を、突然として火花が爆ぜる。と、直後に再びスネークの足元を爆ぜ、気付けば観客の声の間からフライングプラットフォームの飛行音が聞こえてきていた。
「スネーク！　まだだっ！」
遠くから聞こえてきたその声に、その場にいた全員が振り向く。
「オセロット！？」
「あれが……？」
若かりし頃のオセロットに、多少驚愕の声を上げるソリッド。他の、ザ・ボスとカズヒラ、そしてフォックスを除いた5人も、驚いているらしい。そんな蛇達をよそに、フライングプラットフォームから飛び降りるオセロット。即座にスネークに腰から抜いたシング

ル・アクション・アーミーを突き付け、全員の身動きを実質的に止める。
「最後の勝負がしたい。この大会、最後の勝負だ」
「……いいだろう」
湧き上がる歓声。まるで質量をもったような歓声に身を包まれる中、スネークはシングル・アクション・アーミーをオセロットに渡す。オセロットは自身が持っていた物と共に内部の弾丸を全て落とし、一発だけ装填する。弾倉を回し、止める。ジャグリングの要領でシャッフルし、地面に置く。スネークは左を選び、互いに銃を拾い背中を合わせる。WIG機内を思い出し、感傷に浸りたくなるが、今はそんな時間はない。いつのまにか、2人以外は蛇達も離れている。
先程までの歓声が嘘のように、今は静かだった。風の流れすらわかるほどに。一歩一歩踏み出す両者。靴音だけが響き、互いに5つ奏でたところで止まる。振り向きざまに銃口をお互い突き付け、「勝負」が始まった。一回、二回、三回……トリガーが引かれて、撃鉄の落ちる音だけが響き渡る。静寂が緊張をはらみ、張り詰めた風船のように空気が震える。そして五回目、ついに決着がついた。
「ぐっ！」
火薬の炸裂音とほぼ同時に、下腹部を抱えるオセロット。対するスネークの持つシングル・アクション・アーミーの銃口からは、微かに煙が揺れている。スネークが勝ったのだと、周りが悟るのには、余裕で数秒かかった。腹部を抱えていたオセロットが、膝をついてうつ伏せに倒れていく。再び走る緊張。
「まさか……お前の運が上回ったか……」
どさり、と倒れ伏すオセロット。皆動けず、数秒が経過した。そして――――
「じゃなーい！　空砲だ」
突如として、けろっとした顔でオセロットが立ち上がった。今度は、その驚きで何も言えなくなる会場。そんな会場の雰囲気をよそ

に、当事者のオセロットは会話を進める。スネークの肩にぽんと手を置き、楽しそうに笑う。
「楽しかった。また会おう……ジョン」
その言葉に、スネークも僅かに笑みを浮かべて返す。フライングプラットフォームは奇跡的か意図的かは分からないが無事だったようで、エンジンをかけて空へと飛んで行ってしまった。

『え、えーと……とりあえず続行させてもらってもいいかな？』
『え？　あ、ああ。頼むよ、ジョニー。ってどうしたんだい？』
『ま、また腹が……！　漏れる……！』
どたどたと先程とは別のトイレへと向かって走るジョニー。呆れ果てた司会陣は、そのまま進行を続行する。
『えー、とりあえず順位に変動はないため、ビッグボスこと、スネークの優勝は変わらない。さて！　表彰式に移るぞ！』

表彰台に上るスネーク、ザ・ボス、そしてソリッド。カズヒラが、台の上に何か円盤状の物を載せている兵士をひきつれて三人の前に近づく。
『えー、まずはソリッド・スネーク！　君はこの大会で見事三位に輝いた！　よって、俺達運営委員会から、銅の歯車（ブロンズ・ギア）を授ける！』
銅製の歯車らしい。それには、「三位入賞の功績を称える　蛇最強決定戦運営委員会」と記されていた。ソリッドは少し照れ気味のようだ。
『そして、ザ・ボス！　あなたは、この大会で見事準優勝に輝いた！　よって、俺達運営委員会から、銀の歯車（シルバー・ギア）を授ける！』
続いて銀製らしい歯車。「準優勝の功績を称える　蛇最強決定戦運営委員会」と記されていた。ありがとう、と微笑むザ・ボス。

『そして！　今回見事優勝したネイキッド・スネーク！　流石、全ての蛇達と直接の関係がある男だ！　あ、いや、ライデンはないか。まあいい。あんたには、この金の歯車（ゴールド・ギア）を授ける！』

まばゆい黄金の歯車。「見事優勝した功績を称える　蛇最強決定戦運営委員会』と記されている。若干どもりつつ受け取るスネーク。歓声が今までにないほど沸き起こり、カズヒラ達や他の蛇達も拍手を送る。もっとも、リキッドとソリダスだけはテンションが低いが。

『さあ、ボス！　何か感想を！』

すっかり司会者が板についたカズヒラが、スネークにマイクを向ける。

「お、おお。そうか？」

少しだけ鎮まる歓声。いつのまにか、スネークを囲むのは選手や司会陣だけではなく、ゲスト席にいたはずのゼロ少佐やパラメディック、シギント、ＥＶＡ達もいた。

『俺は……多少高価なもんでも、蛇の方が良かったなぁ』

しーん、と静まり返る会場。しかし直後、爆発したように歓声の嵐と、一部ブーイングが飛び交った。

「スネーク……君という男は……！」

「もう好きにして……」

「なんでＦＯＸには変人しかいないんだ！」

「あなたのバカは命がけ！？」

もはやゲスト兼友人達にもバカにされるスネーク。こうして、この大会は幕を閉じたのだった――――――――――

完結編（表彰式）（後書き）

今回まで、作者のばかげた戯れにお付き合いいただいた方、本当にありがとうございました。そしてごめんなさい。

結局のところ、蛇達は全員『愛国者達』に対抗していた『影』だったために、であっても喧嘩にはなりそうにはないなぁ、なんて普段考えてはいたのですが。フラストレーションの蓄積でなぜかこんな話になってしまいました。

オセロットが出たら、やっぱり「じゃなーい！」はやらせないと！　ということで若干無理やりな気もしましたが、入れてしまいました。

それでは、また私の作品を見てくださる機会があれば、よろしくお願いします。

「また会おう！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8353w/

ひいっ！　毒蛇だらけの最強決定戦

2011年9月29日03時19分発行